



Title	青少年施設存における審美意識の形成
Author(s)	夏, 麒
Citation	大阪大学, 2019, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/72342
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

論文内容の要旨

氏 名 (夏 麒)

論文題名 青少年施蛰存における審美意識の形成

論文内容の要旨

中国現代作家、施蛰存（1905年～2003年）の文章表現には、“色、幻、奇”などの美意識があると言われている。しかし彼のそのような美意識について深く分析した先行研究はない。

施の芸術的活動のもっとも成熟した時期は23歳～33歳であると本人も言っているが、このような美意識はどのような影響で生まれ、どのように形成されていったのか、それを跡付けるのが本論文の目的である。

第1章は、施蛰存の美意識における「耽美」的特徴を検討する。この特徴は既に先行研究によって指摘されているが、その芸術的特徴を青少年期の施蛰存が身につけた背景には、どのような芸術環境があったのか。それを明らかにするため、本章では、美術と文学という複眼的視点で考察を行なった。具体的には、「画師洪野」という小品を分析し、そこで取り上げられた画家としての洪野、及び洪野が参加した芸術団体天馬会の歴史資料を調査した上で、青少年期における施蛰存の美意識形成への影響を論じた。

感受性の高い青少年期だった施蛰存は、洪野から多くの西洋絵画の画法を吸収した。また、洪野との間に絵画自体についての議論も行っている。施は洪野の「黄昏」に詩的表現を見たが、芸術（絵画）と文学にも新たな融合の可能性があることを認識したものと考えられる。

洪野の作品「黄昏」と「花鳥」を分析すると、洪野の作品は自然に近い奥行き感のある情景を表現する透視法及び遠近法の画法を使っている。若き施蛰存はそれを洪野の絵から鋭く読み取っており、さらに施蛰存の青少年時代に始まった劉海粟を代表とする西洋画化運動の表現主義も施蛰存に大きな影響を与えたと思われる。

施蛰存は、このように表現主義の影響をうけ、また、盟友洪野の、西洋絵画美にあふれる絵に刺激され、さらには彼と活発に行った芸術論議の中で、絵の中に詩的要素を見出していったと思われる。感受性豊かな青少年施蛰存は、そのような環境の中で自然と耽美的美意識を磨いて行ったと思われる。

第2章では、青少年期の施蛰存が、当時の世界的な大都市であった上海という商業・美術環境に囲まれ、『礼拝六』の美術編集者丁悚らが発信した近代西洋画の教養・知識を吸収したありようを分析した。また、ウェギリウスの理想郷詩やヴェルレーヌの象徴詩を模倣し、視覚的イメージの顕著な英米象徴詩、イマジズム詩も学び、新たな文体を摸索した。「牧歌」は、南欧州やギリシア・ローマ風の自然風景を読者に連想させるが、これは施蛰存が、西洋近代の風景画（美術）や風景描写（文学）で用いられた、当時の中国文学にはまだ見られていない西洋式遠近法の風景描写手法を、無意識に活用したためではないかと論じた。

『江干集』に現れる中国江南地方の白描による線画風の田園風景、「牧歌」に現れる欧州の油絵イメージの田園風景から考えると、作者は西洋式遠近法の構図を、小説「牧歌」などの風景描写にしっかり持ち込んだと思われる。これにより、彼の美意識の表出としての耽美的表現力が更に向上していった過程を明らかにした。

このように、作家としてのキャリア初期の施蛰存を取り巻く芸術環境や、ほかの様々な芸術家から得た画法や絵画表現力が最終的に、『江干集』や「牧歌」の田園風景のように、読者が小説を読むだけで広々とした景観をイメージできる文書表現能力のある美意識形成を成し遂げていったと考えられる。

第3章は、上海『時事新報』副刊『学燈』に掲載した「「流雲」之我見」（1924年8月8、9日）に基づき、施蛰存の初期作品に現れる美意識について考察した。

施蛰存は、18歳から23歳の頃に、宗白華の美学の影響を受けた。同時に施の美意識には、中国の伝統線画や、美的距離感、またユーモアの表現法などの種々の表現技法が、顕著に現れている。それらの技法は、「自然や物事を的確にとらえることの重要性」をうたっており、中国の道家哲学や禅の思想と通底するものであることを明らかにした。

施の習作期の美意識の特徴は、詩趣と詩形のバランス感に拘って、自然風景の描写で詩人の情緒の美を表出することを強調していることが明らかになった。この考えの根底には、彼が15歳から勉強してきた「道家や禅の美意識」の思想があり、彼の特徴的な3つの表現のありようもそれらと関連することが分かった。つまり、作者の情緒や思いを自然風景に溶け込ませ、自然をよりありのままに表現する道家、禅の思想が施の方法の根底にあり、彼の作品の美的表現が形成されたものと考えられる。

第4章では、『学燈』に掲載され、施蛰が翻訳した「行為論是什麼？」を分析した。『学燈』の読者であった施蛰存の行動主義心理学の学習過程は、『学燈』における論議の流れに導かれ、そこに『学燈』の重要な執筆者である朱光潜との接点を見て取ることができる。そのことが施蛰存を行動主義心理学の探究へと進ませる契機になったということを示した。

施蛰存は、ジョン・ワトソンの行動主義心理学の翻訳を通じて、行動主義心理学に興味を示し、その心理分析の手法を学んだ。ここから、施が、他人の心理や行動を観察してから分析するという実験的観察法を、後の作品「旧夢」、「桃園」に活用したことを指摘した。

更に、施は、行動主義心理学や美学の学説を当時の中国に紹介した第一任者である朱光潜の影響を『学燈』などの媒介を通して受けており、行動主義心理学や心理的距離の考え方が彼の美意識の中に刻まれることになった。施が興味を持ち習得した行動主義心理学の実験観察法は、人の表情や行動を観察するために一定の距離を置くことがポイントである。朱のいう心理的距離説も、美を表現するためには、言語による距離の表現が必要であるとしている。この距離感というのは、行動主義心理学と美学では意味が異なるが、物事を正しくまたは美的に表現するためには、『距離感』がキーワードとなると考えられる。施も、彼の美意識形成の中でそのような思想を持っていた。

第5章は、「妮儂」にポーの小説の影響が、「魔道」にドールヴィイの恐怖小説の影響があったという施蛰存の証言を具体的に跡付けできた。更に、施蛰存の「妮儂」と「魔道」を、世紀末文学の神経症小説（本章では主にデカダンス小説と並列して論じている）として、怪奇的美意識という観点から分析した。その結果、この時期に於ける施蛰存の美意識（怪奇的美意識）の形成過程においては、「妮儂」における、男性主人公に見られる悲観主義や、「魔道」に見られる男性主人公の被害妄想症・加虐症や被虐症など、エリスの性心理学が影響したことが分かった。

施蛰存の怪奇的美意識は、その時代の最新の心理学知識と世紀末文学の神経症小説を通じて形成された。この美意識の形成は幾つかの段階を経て、次第に発展していったとみることができる。第一段階は、「妮儂」に見られるような、ポーに触発され、また西洋魔女物語の影響も受けた耽美的美意識の段階である。第二段階は、エリスの性心理学とフランス恐怖小説に触発された「魔道」に現れているような、驚きと怪奇の美の段階である。

以上の考察から、施蛰存の美意識は、彼と親交の深かった美術家や彼を取り巻く美術環境により多くの影響を受け、美的遠近感の表現などの耽美的な表現手法を習得していったことが明らかになった。また、施蛰存は、禅や道家哲学に精通した画家や作家の影響を受け、更に、独学でイマジズム的な絵画的文学描写法も身に着けていった。施蛰存は心理学、特にその当時最先端であった行動主義心理学の学習や朱の学説の影響を受け、その美学に距離感の考えを導入した。エリスの性心理学やポーやドールヴィイの小説の影響によって、施の美学にさらに怪奇的美意識表現が加わった。以上のように、施の美意識は、美術や心理学、西欧文学の影響を色濃く受けて、耽美的で怪奇的な表現を構築していったのである。

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 (夏 麒麟)				
	(職)		氏 名	
論文審査担当者	主 査	教 授	青野 繁治	
	副 査	教 授	高階 早苗	
	副 査	准 教 授	今泉 秀人	
	副 査	准 教 授	林 初梅	
	副 査	准 教 授	深尾 葉子	

論文審査の結果の要旨

本論文は、中国の現代派作家施蛰存の青少年時代つまり文学観形成期における美意識（中国語では「審美意識」）がどのように形成されたのかについて、土山湾画館出身の画家との交流や雑誌を通じての美術的体験と理論的研鑽、西洋文学の受容と心理分析的方法論の獲得といった観点から、明らかにして行く試みである。この時期の施蛰存について、文学だけにとどまらず、美術、心理学、哲学といった方面にまで視野に入れた考察を行った論文は、これまで前例がなく、当該分野における先駆的な論文として評価できる。

論文は「はじめに」を除く全5章からなる。

第1章は、教員時代の同僚であり、遠近法など施蛰存の絵画についての知識と美意識に影響を与えた画家である洪野との美学的交流を、施蛰存の散文「画師洪野」をもとに考察を加え、洪野が高く売れたはずの展覧会の入選作である「黄昏」を施蛰存に贈呈した背景に、施蛰存の結婚があることから、結婚祝いの贈答品であったことを明らかにするとともに、施蛰存を洪野に紹介した友人が、丁玲の夫胡也頻であったことを指摘、当時の文学者たちが雑誌の挿絵を通じて、美術界の人々と交流があったことを明らかにしている。施蛰存自身、上海画壇における劉海粟ら天馬会の展覧会を見に行っており、その表現主義的画風の影響を受けたとする。

第2章では、18歳のときに発表した習作小説集『江干集』に田園風景の描写が特徴的であることに注目し、鴛鴦蝴蝶派の雑誌『礼拝六』の挿絵の担当者丁悚から受けた影響および当時施蛰存が愛読した英米のイマジズム詩の影響を指摘するが、さらに施蛰存自身、『半月』誌の表紙絵の美人画をもとに詩を書き、編集者の周瘦鵬がその詩と絵をセットにしてカレンダーにしたエピソードから、中国の伝統的な「詩画同源」の考え方にもとづき、ヴェルレーヌの詩にコロアやプーサンの風景面を見出していた施蛰存が、自分の小説の自然描写において、西洋画の牧歌的世界を、無意識のうちに遠近法を用いて描き出したのであるとする。

第3章は、施蛰存が『時事新報』副刊『学灯』に発表した「『流雲』之我見」を糸口に、郭沫若、田漢、宗白華の三人がそれぞれ文学観を述べた『三葉集』を読んで、宗白華のいう「汎神論」に共感した施蛰存が、宗白華の新作詩集『流雲』に期待をしたが結局失望に終わった、その議論に見られる施蛰存の美意識を禅と陶淵明的隠逸の思想に求めており、その美意識の特徴として、白描と線画、距離感、ユーモア、ナンセンスを指摘する。

第4章では、同じく『学灯』に掲載されたものであるが、心理学者ジョン・ワトソンの「行動主義心理学とは何か」の施蛰存による、これまで存在を知られていなかった中国語訳を取りあげ、『学灯』における心理学紹介の状況と行動主義心理学の位置づけ、『学灯』に見られるそれらの記事と編集者朱光潜による施蛰存への影響、とくに施蛰存が「鴉」などの作品で後に実践する「心理的距離」の考え方が提示される。

第5章は施蛰存の初期の作品「妮儂」や「魔道」を論じている。いずれも施蛰存自身がそれぞれポーとドールヴィイの影響をうけた作品であることを証言しているが、ポーの影響については先行研究が

あるものの、ドールヴィイの影響については、検討が行われて来なかった。「妮儂」に対するポーの影響として、先行研究では、「モレラ」の影響を指摘するものがあるが、本論文では、さらに「ライジーア」の影響もプロットや題材の比較によって明らかにしている。施鰲存の「魔道」については、ドールヴィイの黒魔術やサディズム、マゾヒズム的描写が見られるが、それらはハブロック・エリスの『性の心理』からの影響であることも指摘されている。

以上のように、本論文は、施鰲存の美意識の獲得を跡づける作業を通じて、施鰲存が作家としてどのような準備活動を行ったのか、を明らかにしており、施鰲存文学を読み解く上で多くの示唆を与えるものである。中国現代文学と美術という、これまで誰も踏み込まなかった領域を開拓し、これまで知られていなかった、全集に収録されていない文献を見つけだし、そこから新たな視点を見出している点も評価できる。

ただこの論文には欠点も多々見られる。まず日本語が十分にこなれておらず、論理性にやや難点がある。著者の知識が多面的であるがゆえに、不必要な議論が加わり、論旨が分かりにくくなっている個所もある。やや結論の叙述に性急で、論旨の展開が強引だと感じられる個所もある。論点の一部は十分論拠が固まっておらず仮説の域に留まっているものもある。

しかしながら、本論文が明らかにした数々の論点の価値はそれらの欠点によって相殺されるものではない。今後も本研究で得た知見を深めていくことが期待できると考える。

よって論文審査委員は全員一致で、本論文が博士の学位に値するものであると判断する。